

第709回学術講習会 2011年1月30日(日)

2011年1月30日(日) 森ノ宮医療学園専門学校

◆整形外科疾患

「変形性股関節症に対する運動療法」

—過去22年の経験から—

森ノ宮医療大学 学長

大阪済生会中津病院整形外科

廣橋 賢次 先生

変形性関節症とは、”関節構成体に慢性の増殖性変化と退行性変化(萎縮・変性・壊死)が同時に生じてその形態が変化するもの(Abrams)”とされている。このような変化は、いずれの動関節にも生じる変化であり、また、加齢現象(ageing)の1つとしても認められる。このような変化が股関節に生じた場合に変形性股関節症とされる。

本症は、一次性と二次性のものに分けられており、前者は本症に先行する疾患が認められないものを、後者は何らかの先行する疾患があり、それに引き続いて生じたものである。わが国ではその殆んどが二次性であり、先天性股関節脱臼や臼蓋形成不全、ペルテス病などに続発するものが多い。

症状として、当人が最初に気付くのは痛みである。その後、徐々に病変が進行するにつれて、股関節の可動域制限が生じ、跛行も著明となり、日常生活の動作としては足指の爪切りや、靴下の着脱に不自由を感じるようになり、歩行距離も短くなり、速歩が困難となる。また、股関節周囲の筋の萎縮をきたす。遂には、耐え難い痛みとなり医師を受診する。

治療法としては、手術療法と保存療法がある。前者には、股関節周囲筋を切り離す、筋解離術、骨盤または大腿骨の骨きり術、人工材料を用いるものとしては、人工骨頭置換術や全人工関節置換術などがある。一方、保存療法としては、安静、薬物療法、物理療法(温熱、マッサージ、水治療法など)、あるいは、種々の運動療法や装具療法などがある。

私たちは、1984年以降、運動療法なかでも積極的な股関節周囲筋の筋力強化のための運動療法を行ってきた。その理由として、骨格筋の働きに、1)関節を動かす、2)体温の産生、3)関節の動的

支持、4)体液循環の促進、などのほかに5)関節への衝撃を吸収する作用(shock absorbing action)(働き)がある。とくに、5)の働きは重要であり、これまでのX線像の変化を重視した発想とは異なるものである。むしろX線像では認められない、股関節周囲に存在する強大な筋の働きを重視したものである。

方法としては、これまでの開放運動連鎖(open kinetic chain, OKC)ではなく、閉鎖運動連鎖(closed kinetic chain, CKC)による運動を指示してきた。その理由としては、CKCの方が関節にとってより安全であり、日常生活動作に近い動作であるからである。

その結果、本法を開始してからの約22年以上の、資料の整った123例190関節では、疼痛は、病変が前期・初期の症例では約96%が、進行期・末期では約75%が軽快している。X線像の変化は、約35%は徐々に進行しており、不変が約60%、逆に、むしろ改善したものが約7%に認められた。手術療法(骨きり術、人工関節など)に移行した症例は19例23関節の12%であり、このうち全人工関節に移行した症例は10例12関節(6.3%)であった。

以上のことから、本疾患に対する本運動療法の治療上に占める位置づけについて述べる。



講演中の廣橋賢次先生

◆鍼灸治療編

「上部消化器症状に対する鍼灸治療」

—効果と機序—

明治国際医療大学鍼灸学部臨床鍼灸室

准教授 今井賢治先生

【はじめに】

消化管症状に対する鍼灸治療は、運動器疾患

などに比べて、その機会は少ないかもしれない。どちらかという、患者は随伴症状として、食欲不振や、胃もたれ、腹痛、嘔気、下痢や便秘などを訴え、全身調整を目的とした鍼灸治療が多くなされるのではないだろうか。一方、現代では、機能的胃腸症や過敏性腸症候群などのように、機能的な病態もしばしば鍼灸治療で対処している報告も散見されるようになってきた。この領域の鍼灸治療の機会は決して多くはないが、無視できるものではないはずである。今回は、消化管運動(特に胃運動)における鍼灸の作用機序から臨床応用までを概説する。

【消化管運動における鍼灸の作用機序】

体性一内臓反射に関する知見から、鍼灸刺激は自律神経を遠心性に介して、胃運動の亢進や抑制を引き起こすことがすでに示されている。四肢への鍼灸刺激は副交感神経を介して消化管運動を亢進させ、また、体幹部への鍼灸刺激は交感神経を介してその抑制を引き起こすことが明らかになっている。小生も胃電図(注)を用いた研究において、ヒトでも腹部への鍼刺激で胃機能が抑制される結果を確認した。比較的、鍼の作用機序が明らかになっている領域であるため、その概観を解説する。

【臨床応用の事例】

以下の臨床応用の実践事例について紹介する。

- ・術後消化管運動抑制における四肢への円皮鍼刺激の改善効果
- ・虫垂切除術後に強い嘔気を訴えた症例における・鍼通電治療の制吐作用
- ・脾虚傾向の程度と胃運動異常との関連性
- ・機能的胃腸症患者における鍼通電の治療効果
- ・乗り物酔い(motion sickness)に対する鍼治療の応用の試みとその効果

【まとめ】

当該領域における基礎研究の概要から、これを踏まえた臨床応用の実践事例の現状を紹介することで、参加されている先生方と今後の鍼灸治療の展望と方向性を探りたいと考えている。

(注)胃電図は胃体上部 1/3 辺りに存在するペースメーカーからの電気活動を経皮的に記録する手法で、鍼灸などの微弱な体制刺激の効果を客観

的に評価するのに適した手法であり、その利用は近年広がっている。



講演中の今井賢治先生